



伊藤隆道 「宙に描く」 北品川パークシティ大崎
ステンレス H 3,750、D 2,250、W 2,250

撮影 齊藤大嗣



2016年3月 会報73号

一般社団法人

日本建築美術工芸協会



伊藤隆道

1939年 北海道札幌市に生まれる
 1962年 東京藝術大学卒業
 同年から銀座資生堂会館ショウウィンドウ
 デザイン手掛ける

1968年頃から野外彫刻展に招待出品
 多数の賞を受賞 動く彫刻作品で彫刻家としての評価を得る

1970年 大阪万博 その後沖縄海洋博 つくば博等に参加
 1993年 東京藝術大学教授就任 デザイン教育にも携わる
 舞台美術も手掛ける
 2004年 上海個展 その後中国での展開も加わる
 2008年 上海彫刻公園月湖美術館館長就任

現在 東京藝術大学名誉教授 環境芸術学会名誉会長
 当会会員

「宙に描く」 北品川パークシティ大崎
 撮影 齊藤大嗣

CONTENTS

平成27年度設立記念会・協会賞表彰式	3
平成27年度 AACAA賞・芦原義信賞（新人賞）	4~7
AACAA賞を受賞して「ものづくり」の館を目指して	小幡剛也 8
芦原義信賞（新人賞）を受賞して	原田麻魚 9
景観シンポジウム	
「近郊ターミナルの景観づくりー二子玉川」開催報告	岡 房信 10
景観シンポジウムに参加して	今井康博 11
第2回 街に飛び出す作品展「芸術性豊かな環境と景観の創造」	12~15
時代の華一輪「未来へのファイバー・ワーク」	小泉伸子 16
時代の華一輪 「アートは楽しい」	川原 昭 17
第54回 aaca講演会「次世代に活かす日本建築」に参加して	石田真人 18~20
第10回aaca金沢・富山・黒部地区建築視察会 「日本の美と技 再発見」	井上一三 21
会員活動レポート	
『アンニ・アルパースとアンデスの染織』翻訳出版に寄せて	中野恵美子 22
会員活動レポート	角一吉昭 23
調査研究部会レポート「中之条ビエンナーレ視察」	小野寺優元 24~25
アピアランス	26~27
新入会員・会員の異動・募金のお願い	28

開催日 平成27年12月9日（水曜日）午後5時45分～
場 所 建築会館大ホール（東京都港区芝5-26-20）
来 賓 日本建築学会副会長 児玉耕二様
芦原初子様
旭硝子(株) 日本事業部主席 武内真弓様
出席者 来賓・報道関係 6名 会員・一般 80名
受賞者・応募者 26名 合計 112名
次第 会長挨拶 会長 岡本 賢
来賓挨拶 日本建築学会副会長 児玉耕二様
選考結果発表 表彰委員長 可児才介

岡本 賢会長 挨拶

27年度設立記念会にお集まり頂き、誠に有難うございます。また建築学会から児玉副会長、そして芦原初子先生のご来臨頂き誠に有難うございます。

本日の記念会は27年前（1988年）芦原義信先生が創設され、所管の文部省より設立認可を得て12月に設立記念会を催したところから、毎年開催しております。

特に、この会はAACA賞・芦原義信賞の表彰を主要事業として開催しております。今年のAACA賞・芦原義信賞はそちらに受賞作品が展示してありますし、表の廊下には応募作品すべてが展示されておりますが、今年は56作品が応募され多数の応募に感謝しております。56作品の応募数は過去最大の作品数と聞いております。今年のビジネス賞は60作品でしたので、それに迫る作品数で、このAACA賞・芦原義信賞の社会的な評価と存在が年々高くなっていると感じ、うれしく思っております。賞の内容につきましては、後程、表彰委員長の可児さんから詳しい説明がありますが、まずは、受賞された皆様方に心よりお祝い申し上げます。おめでとうございます。

この協会、総合空間芸術と申しますか街を創ってゆく建築や、アート関係で文化的な生活空間を創造するという芦原先生の理念に基づいて、その空間芸術の関わるあらゆる分野の方たちが集まっている協会です。

またいろいろな協会、建築学会・建築家協会もありますが分野をまたがって各分野から様々な人が集まるという協会はユニークな協会ではないかと思えます。その意味で異業種交流という様々な方々とこの協会をベースにして、交流して頂けるチャンスが生まれる事と思えます。受賞された方々はぜひこの機会に様々な活動をしていただいて、人的な交流をとおして人脈の広がりを図っていただいて、仕事にもつなげて頂け、交友関係も広がると思えますので、そのチャンスに当協会を使って頂きたいと思えます。

この協会はそのほかに、「景観シンポジウム」というその時々ビッグプロジェクトの紹介をするとか、講演会・フォーラム・建物視察旅行などいろいろな事業を展開しております。会員の皆さま方も積極的にその事業の中で活動して頂くことは、この協会の骨子でもありますので、是非様々な場面で活躍して頂きたいと願っております。最近では街中に展示会の会場を造る

うということで、「街中ミュゼ」という名前で作家にアート作品を展示して頂いたり、新しい建築プロジェクトの中にも盛り込むなど、新しい試みを展開しております。これも新しい主要な事業となってゆくのではないかと考えておまして、様々な面でこの協会が社会に認められる活動を、会員の皆さまが進めて頂きたいと強く願っております。

最後に会員の皆さま方のご健勝と、受賞された皆様方が今後さらに次の良い作品を創造されることを願って挨拶いたします。

日本建築学会副会長 児玉耕二様 ご挨拶

只今ご紹介にあずかりました 日本建築学会副会長 児玉と申します。本日は、中島会長が所要で出席できませんので、わたくしが代りまして日本建築学会を代表して、お祝いを一言述べさせていただきます。

先ほどお話しがりましたが27年前の設立ということで、歴代の会長はじめ役員の方々、会員の方々の大変な努力と貢献により、このような素晴らしい協会に発展してきたということで、会長はじめ皆様方に敬意を表する次第であります。

この協会は建築家・美術家・工芸家の方々がコラボレーションして建築空間・文化的な生活空間の創造ということに寄与されてこられたわけですが、日本建築学会の会員にとりましては、この建築会館のギャラリー、あるいはイベント広場で催されております展示会が非常になじみ易いということもありまして、その期間中はこの協会に所属されています建築家あるいは美術家・工芸家の素晴らしい作品を見ながら、刺激を受けまた安らぎを受けている次第であります。建築学会といたしましてギャラリー・イベント広場は建築文化の向上に寄与する催し物に貸し出すということになっておりますので、その目的と併せまして非常にびったりする展示会でございますので、学会と致しましても感謝している次第でございます。また昨年、2020年のオリンピックに向けてということで都市空間の創造がいろいろと話題となっておりますが、その課題の解決の一つにやはり街づくりあるいは建築文化・空間創造があるかと思えますし、色々なジャンルの方がその専門の領域をこえてコラボレーションして街づくり・都市を造っていくことですので、貴協会に対する期待は増々大きなものがあると思えますので、先ほど言われましたように専門領域をこえてのユニークな団体でありますので、それにたいする期待は大きいところだと思えます。

日本建築学会でも今年「建築の声を一つに」ということで意匠設計家・構造家・設備エンジニア、学術団体が共同して何か社会貢献に努めてゆこうとしておりますが、まさに貴協会と交流あるいはコラボレーションしながら都市の創造・文化的な生活空間の創造に一緒に貢献できればと思っております。

本日は誠にありがとうございます。

審査総評

選考委員長 芦原太郎

AACCA賞は景観・街並み・ランドスケープから建築空間やインテリアまで、スケールを問わず建築・美術・工芸の力で人々に感動を与える美意識に支えられた環境や空間を創り出した作品に与えられるものです。

本年は57点の応募作品が寄せられ、多くの力作を見られたことを選考委員としては大変嬉しく思いました。一次審査では書類とパネルにより選考して現地審査対象作品を15点に絞りました。現地審査では選考委員が手分けして2人以上で現地に赴き設計者や管理者から説明を受けて行いました。最終審査は各担当選考委員による現地審査報告を踏まえた上で、全体協議により各受賞作品を決定しました。AACCA賞は新人を含む全ての応募作品の中から最優秀の1点とし、さらに準ずる優秀賞3点と奨励賞2点を選定しました。AACCA賞の竹中大工道具館新館は、展示されている大工道具と匠の技が生かされた建築空間が相俟って、建築づくり、ものづくりの本質を語りかけてくれています。日本の伝統的美意識を継承した極めて完成度の高い作品であり正にAACCA賞に相応しいものと言う事が出来ます。

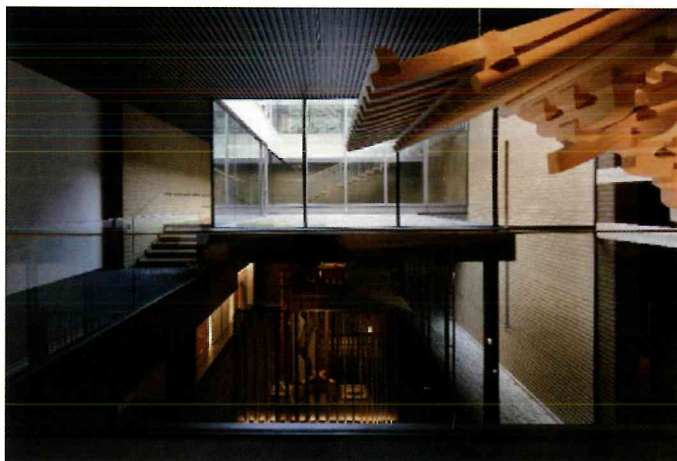
優秀賞のROKI Global Innovation Center ROGICはナミックな空間を創り出した建築的観点、清津倉庫美はアートによる街づくりの観点、三井ガーデンホテル新町別邸は街並みから造園・建築・インテリア・家アートにいたるまでのコラボレーションの観点からそれ優れたものでした。特別賞の大手町タワーは経済原生成される現代都市に都市計画的観点から一石を投じのであり、またザ・リッツ・カールトン京都は商業主流されることなく質の高いアートがインテリア空間へ導入されています。これらの作品はそれぞれ社会的な影響力を持つものであることを考えて特別賞に相応ものとししました。また新人賞である芦原義信賞は新人の最優秀賞として1点を選びました。芦原義信賞のSe新しい感性で、斬新な空間をさりげなく創り出し、瀬海に繋がる景観に新たな魅力を付加することに成功します。作者の将来に更なる展開を期待して芦原義信賞ります。今後はAACCA賞のプレステージをより高めて広場に発信して行くことと同時に建築・美術・工芸に関大勢の方々に裾野を広げてこの賞を浸透させていくこの両面を戦略的に進める事が大切だと考えます。

第25回AACCA賞 受賞作品

AACCA賞

「竹中大工道具館新館」

作者：小幡剛也・須賀定邦・中西正佳
 (竹中工務店 大阪本店設計部)
 所在地：兵庫県神戸市中央区熊内町7-5-1



(撮影：古川泰造)

AACCA賞・優秀賞

「清津倉庫美術館」

作者：建築 山本想太郎 (山本想太郎設計アトリエ)
 展示 原口典之 遠藤利克 青木野枝 戸谷成雄
 所在地：新潟県十日町市角間末1528-2



(撮影：山本想太郎)

「ROKI Global Innovation Center -ROGIC-」

作 者：小堀哲夫建築設計事務所 代表取締役社長 小堀哲夫

所在地：静岡県浜松市天竜区二俣町二俣2396



(撮影：新井隆弘 新 良太)

「三井ガーデンホテル京都新町 別邸」

歴史の記憶を継承する京の邸(やしき)としてのホテル

作 者：基本構想者：アーキテクトオフィス 石川雅英

監修者：S&T FIVE STAGE 津田榮一

設計者：竹中工務店 大阪本店設計部 木戸貴博・小林浩明

三井デザインテック 森 正史・山口昭彦・神田 恵

永山祐子建築設計 永山祐子

荻野寿也景観設計 荻野寿也

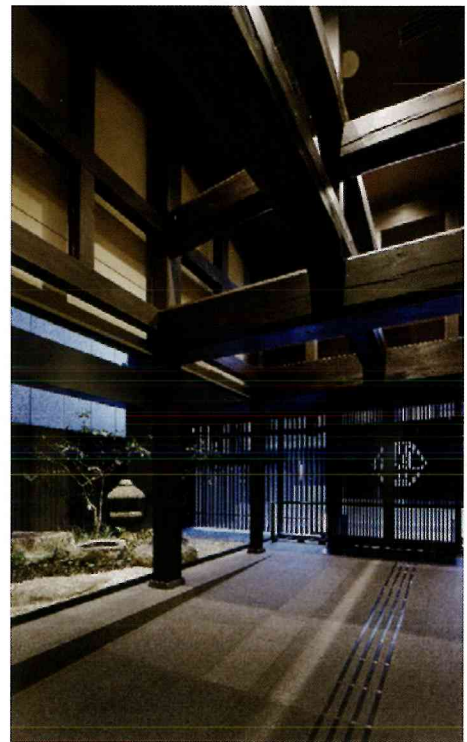
アーティスト：小清水漸

アートプロデュース：TAKプロパティ 村井久美

所在地：京都府京都市中央区新町通六角下ル六角町36



(撮影：古川泰造)



AACA賞・奨励賞

「FARMUS木島平」

作 者：三浦丈典/一級建築士事務所 スターパイロツ

所在地：長野県下高井郡木島平村大字上木島38-

(撮影者：三浦丈典)



(撮影者：浅川 敏)



「アシックス スポーツ工学研究所」

作 者：建築設計：竹中工務店 日野宏二・松浦真樹
アートプロデュース：TAKプロパティ 村井久美
中庭アート監修：行武治美
屋上アート補修・移設監修：金沢健一・福島敬恭
所在地：神戸市西区高塚台6-2-1



(撮影：古川泰造)

AACA賞・特別賞

「大手町タワー」

作 者：大成建設一級建築士事務所
田口 晃・横手真一郎・国保 潤・蕪木伸一・山下剛史
所在地：千代田区大手町1-5-5



(撮影：田口 晃)

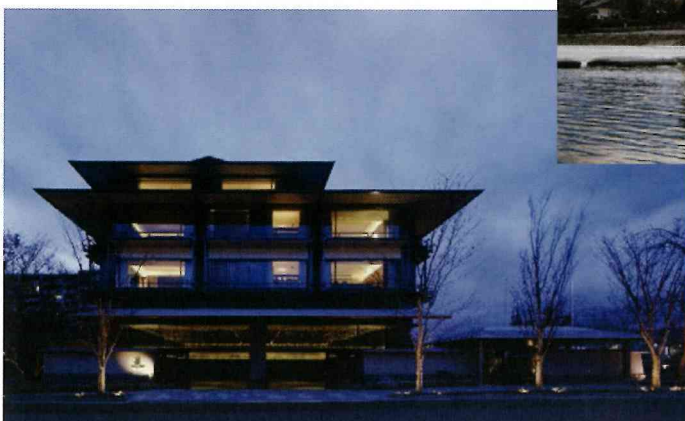


「ザ・リッツ・カールトン京都」

作 者：日建設計 大谷弘明
所在地：京都市中京区鴨川二条大橋畔



(撮影：スタジオムライ)



(撮影：山崎浩治)

芦原義信賞

「Seto」

作 者：原田 真宏+原田麻魚/MOUNT FUJI ARCHITECTS STUDIO

所在地：広島県福山市沼隈町大字常石字根引2048-1他



(撮影:鈴木研一)

平成28年度 AACAA賞 募集案内

日本建築美術工芸協会は建築家芦原義信氏らが設立した、建築家・美術家・工芸家・デザイナー達が連携協力し、芸術性豊かな環境と景観の創造を目的として、我が国の文化向上に寄与する事を願い設立された団体です。AACAA賞は当協会の設立理念と目的に叶い、建築、美術、工芸、ランドスケープなど様々な分野が協力し、融合して創造された文化的環境と美しい芸術的景観を対象とする協会賞です。芦原義信賞は協会賞応募者の中から新人で、優れた文化的環境や芸術的景観を実現させた未来ある、個人、グループ、団体を選び表彰する新人賞で、新人に年齢制限はありません。

募集期間 平成28年7月1日(金)～同年9月9日(金) 選考期間 同年9月12日(月)～同年11月25日(金)

受賞作品発表・表彰式 平成28年12月14日(水)・28年度協会設立記念会にて



小幡 剛也

株式会社 竹中工務店

大阪本店 設計部 グループ長

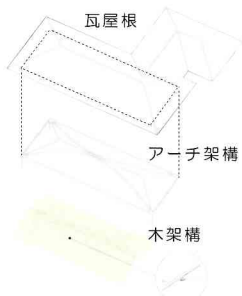
日本建築美術工芸協会 法人会員

日本で唯一の大工道具の博物館「竹中大工道具館」は、創設30周年を機に「人と自然をつなぐ、伝統と革新をつなぐ」をテーマに、竹中工務店ゆかりの地に移転し、新たな一歩を踏み出した。新館の計画にあたり、敷地の豊かな自然環境を生かすこと、そして時を超えて脈々と伝わる職人技を現地現物で感じ、職人の心意気―“ものづくり精神”―を後世に伝えていくことを目指した。



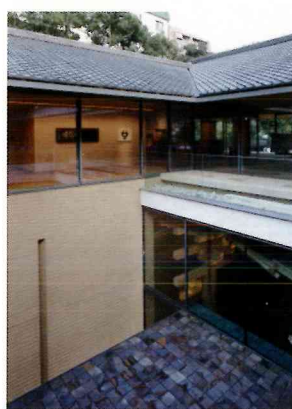
「人と自然をつなぐ」

敷地は神戸六甲山の麓、その豊かな緑が新幹線のホームを超え南側に延びた、こんもりと木々に囲まれた不思議な場所である。その豊かな緑の環境の中に、既存の茶室を残し、樹木の伐採も最低限に留め、既存建物と調和する寄棟瓦屋根の平屋の佇まいを実現した。地上に企画展や講演会に対応できる開放的な多目的ホールを、地下には安定的な環境が求められる常設展示スペースと木工教室を設ける、地上1階・地下2階の3層構成とした。緑に囲まれるホールは、六甲山の森との連続性を感じられるよう、大スパンの鉄骨アーチ型屋根架構により南北の抜けを確保し、その中に木架構を入れ込み和風の繊細なスケール感をもたせ、木材と鉄の長所が融合するワンルーム空間とした。地下の展示空間には、2層にわたってつながる立体的な中庭に、吹き抜けと経路空間を組み合わせるダイナミックなシークエンスによって、訪れる人々が外部の豊かな自然環境を充分に感じられるようにした。



「伝統と革新をつなぐ」

かつては当たり前のように使われていた伝統的な木、土、漆喰、瓦、鉄、石といった自然素材を、その扱いに秀でた職人や技術者との対話を通じ、建物で「ものづくり」を肌で感じられるよう、その仕上のあり方を追求した。結果、むくり瓦屋根、達磨窯で焼かれた中庭の敷瓦、聚落土を混ぜた漆喰壁、土壁削出しの大壁、杉無垢材の特殊仕口による天井架構、鉦(ちょうな)名栗板仕上の扉等が実現した。また展示室の安定的で快適な環境を実現するアルミ輻射空調システム天井、展示への期待感を演出する浮遊する木無垢板階段、型枠職人をはじめとした現場の心意気を象徴する杉板本実型枠のヴォイドスラブ天井、高周波曲げ加工と鋳物ジョイントによるホールの鉄骨ダブルアーチ架構など現代の革新技術も取り込んだ。伝統と現代の革新の技と心を区別なく空間に編み込んで、今の時代の職人たちの心意気や精神性、そしてものづくりへの挑戦心や醍醐味を訪れる人々に体感してもらいたいと考えた。



「ものづくりの館へ」

大工道具は人の知恵と技を通じて、自然を人の生活につなげる役割を果たしてきた。そして道具職人のたゆまぬ努力による進化の連続を経て、珠玉の大工道具が生まれた。我々も設計施工の過程において、施主(大工道具や職人の研究者)・職人・設計者・施工者が一丸となり新たな可能性を求め挑戦することで、“ものづくり精神”の結晶となる建築を目指した。常に新しい可能性を求め挑戦するものづくりの心が、この場所を通じて次世代へとつながっていくことを願ってやまない。





原田 麻魚

一級建築士

MOUNT FUJI ARCHITECTS STUDIO

東北大学 工学部 建築・社会環境工
学科 非常勤講師

これまでの私たちマウントフジアーキテクトスタジオの建築には共通する姿勢があります。それは、建築は出来上がったその時にすでに環境に還元されるものである、という認識です。建築を成立させる背景としての社会的要請と自然的要請があるとすれば、社会的要請については日々移り変わる社会状況の中でその変化に寄り添い、また積極的に建築が社会に語りかけるべく多く議論され、ある時は共通テーマとして建築の姿形に影響を及ぼしてきました。しかしながら社会は移ろうのもので、今では社会状況が建築の寿命よりも早いスピードで変化することに気付かされてきました。

建築は良き存在として環境に還元されたとき、社会資本として私たちの生活を真に豊かなものにしてくれるでしょう。その資本価値を持続することは、豊かな都市ストック（建築資産の蓄積）を形成するために必要な条件と言えます。求められるのは建築の長寿命化ですが、都市ストックと言う時には、物理的な長寿命化のみならず価値の長寿命化を図らなければなりません。

そのため社会的要請と共によりロングスパンの自然的要請にも耳を傾けると、和辻哲郎の風土やローカリティなど、すでに建築に翻訳された多くの知見があります。そしてそれに加えて頼りになるのは「場所を知る」というシンプルな態度です。それはエモーショナルな発想を促す効果よりもむしろ、その場所との対話を通して微細な自然的要請の声を聞くためのもの（こと）かもしれません。

今回受賞作品のSetoは、瀬戸内海に面した造船会社の社宅です。入り組んだ海岸線の続く広島県の小さな町では、地域を代表する大企業の造船会社が海沿いの埋め立て地に一筆書きのような長大な工場地を形成していました。一方で、一步内陸に入ればすぐに急峻な山にへばりつくような集落が散見され、車両は山肌に削られた細い道路をなんとか行き交っています。住民の生活は山肌の表面に壁のように現れ、人が一人通れるだけの幅の里道がネットワークを形成し、狭い車道の通行の危険から等身大の営みを守っているようでした。

敷地は海岸線（だったところ）に沿った県道と、それに並行して山肌に等高線状に伸びたやっとな車が通行できるような生活用道路に挟まれており、おおよそ20m程の高低差の擁壁が敷地内を横断していました。県道と生活用道路はこの擁壁や崖によって上下に長く分断されていますが、よくよく歩き回れば、山肌の住宅地に住む人が県道に降りるための里道が敷地周辺を登山道のように曲がりくねりながら上下の行き来を支えていることがわかります。

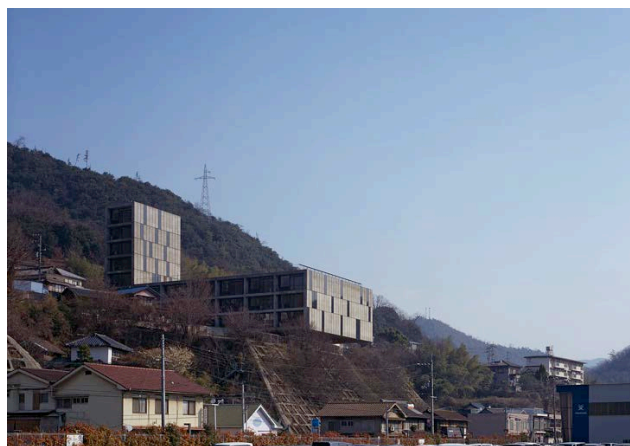
この場所に、造船会社の社宅であると同時に地域の知名度を上げるまちおこしの役割を担う建築を要望されました。

広く周辺を見ると県道のある低海拔の埋め立てエリアにコンビニの駐車場や小学校の校庭がある他に、生活圏である山肌の地域にラジ体操や放課後遊びなどの日常的なアクティビティーを受け入れる受け皿としての「平らな場所」が不足していることに気がつきます。

そこでSetoでは、社宅という企業に従属した建築でありながら地域に開かれた「場所」を創出しました。社宅の屋上テラスは圧倒的に不足している水平面を地域に提供し、さらに「わがまち」を俯瞰する国見の視点となることで、周辺の住民と社宅の住民の自然なコミュニケーションの場「未来のわがまちを想う場」となることを意図しています。生活用道路側からゆったりとした階段を上ると、この地域では貴重な広場とその向こうに瀬戸内海の眺望が開けます。住民はまずこの広場（4階レベル）に立ってから、二つの穴（ライトコート）にある階段を降りて1~3階の住居階へ、5~8階の住居へは広場に面したロビーから、アプローチします。この二つのライトコートは海風と上下からの自然光を中廊下に運びこむ環境装置でもあり、どんよりしがちな中廊下を快適な生活空間として機能させています。

また、敷地内にある20mの大きな擁壁は、行政の所有物という位置付けから、擁壁構造に影響のある建築計画を避け、擁壁に依存しない建築単体での構造安全性を計画する必要がありました。そのため、基礎杭を崖からオフセットし、基礎杭を重心に南側は崖上に浮かび北側には重りとしての高層棟を配置する天秤構造による計画としました。このことにより広い屋上広場を実現したのはもとより、海から年間を通してもたらされる安定した海風をライトコートの下から取り入れ、中廊下を経て階段室につなぎ、8層分の煙突効果による共用部の自然空調を可能にしています。また建築の下にできた外部空間は雨の日の格好の子供の遊び場となっています。

存在感を持ちながらも多様な環境と対話するように生まれてきた建築であることで、建築作品ができた時点での瞬間的な話題性によるまちおこしのみならず、長く、地元の人々の思想によるまちづくりがこの場所に生まれることを願っています。



撮影：鈴木 研一



岡 房信

景観シンポジウム委員会担当事務
日本建築美術工芸協会会員

平成27年度景観シンポジウム事業の第2弾にあたる頭記のシンポジウムは、去る平成28年1月26日（火）にiTSCOM STUDIO & HALL二子玉川ライズで開催されました。今回の参加者数は185名、うち126名の方々にはシンポジウム終了後の交流会にもご参加頂きました。

2016 aaca 景観シンポジウム
近郊ターミナルの景観づくり 「二子玉川ライズ」
シンポジウム 15時～17時30分
第一部 講演
講師 渋谷宗彦氏 (東京急行電鉄 都市創造本部 運営事業部 営業二部 総務部長)
講師 宮原義昭氏 (株式会社アール・アイ・エー 代表取締役会長)
講師 佐藤 健氏 (株式会社日建設計 設計部門 副代表 兼 設計部長)
第二部 パネル・ディスカッション
ファシリテーター 今村創平氏 (千葉工業大学 建築都市環境学 准教授)
パネリスト 渋谷宗彦氏 (東京急行電鉄 都市創造本部 運営事業部 営業二部 総務部長)
パネリスト 宮原義昭氏 (株式会社アール・アイ・エー 代表取締役会長)
パネリスト 佐藤 健氏 (株式会社日建設計 設計部門 副代表 兼 設計部長)
交流会 18時～19時30分
日時 2016年1月26日（火）15時～19時30分（受付開始：14時）
会場 二子玉川ライズ・ホール

会場は、田園都市線二子玉川駅東口再開発によって生まれた住宅・商業・業務施設と交通広場が複合された二子玉川ライズの一角に位置します。当日は穏やかな冬晴れに恵まれ、参加者の皆さまには二子玉川ライズの商業モールもお楽しみ頂けたかと思えます。シンポジウムの詳細は会報別冊に譲る事とし、本稿では企画・運営面での工夫を中心に報告させていただきます。

① テーマ・登壇者について

aaca 景観シンポジウムでは、ここ数回、東京都心部の景観をテーマに取り上げてきました。しかし、巨大都市東京で注目すべき景観は必ずしも都心部にのみある訳ではなく、外周部にも核と言うべき地域が多数あります。aaca 景観シンポジウムではそのような地域の景観にも着目し、そのケーススタディの最初の対象として二子玉川駅東口を取り上げる事としました。

現在の二子玉川駅は東急田園都市線と大井町線が乗り入れ、駅の東西両側には大規模商業施設も立地して相当に高密な都市的景観を示していますが、多摩川縁の遊園地であった二子玉川園の姿を懐かしく思い出される方も多いのではないのでしょうか。今回のシンポジウムでは、この変遷の経緯も踏まえて二子玉川の景観を考察するべく、全体テーマを「近郊ターミナルの景観づくりー二子玉川ライズ」と設定しました。

そして、このテーマに沿ったご登壇者として、そもそも鉄道事業者としてこの地域に深く関与してこられた東急電鉄様から渋谷宗彦様、再開発コンサルタント

として地域の皆さんと30年以上にわたって関わってこられた RIA 様から宮原義昭様、二子玉川ライズの現在の姿をデザインされた日建設計様から佐藤健様をお招きし、第一部でのご講演をお願いする事にしました。また、第二部では都市デザイン史に詳しい今村創平千葉工大准教授にファシリテーターとして加わって頂き、ご講演いただいたお三方のお話をより深く掘り下げるパネル・ディスカッションの時間を取る事としました。

以上の通り今回のシンポジウムでは、長年にわたる街の景観づくりを支えるコンセプトと変化する社会経済状況に対応しながら解決策を追求し続けるプロセスについて、それぞれのお立場からお話を伺うという企画になりました。aaca 主催のシンポジウムとしてはやや異色の内容であったかも知れませんが、普段触れる機会の少ない情報を参加者の皆様にご提供できたのであれば幸いです。



② 事前の準備・当日の運営などについて

ご存知の通り aaca 景観シンポジウムは毎年1、7月に開催していますが、過去数年の参加者数を見ると1月は7月のおおよそ60%となっています。このため、今回の事前準備期間中も会員の方々、特に法人会員の方々に繰り返し参加のお願いをさせて頂きました。その結果、1月のシンポジウム参加者数としては平均的な水準を確保する事が出来ました。ご協力下さった皆様に、改めてあつく御礼を申し上げます。

また、今回は東急電鉄様が保有されるホールでのシンポジウム開催という事で、オーナーの東急電鉄様はもとより運営を受託しておられるiTSCOM(イツコム)の皆様からも多大なご支援を頂きました。シンポジウム会場の設営を短時間に切り替えての交流会実施という離れ業も、iTSCOMの現場の皆さんのご協力が無事に進める事が出来ました。更に、aaca 事務局の皆さん、文化事業委員会の関係者の皆さんには、今回も司会進行、参加者の受付や館内誘導等々にご協力を頂きました。この場を借りて、ご協力下さった皆様に改めて篤く御礼を申し上げます。（了）



今井康博

株式会社大林組

本社設計本部設計ソリューション部

日本建築美術工芸協会 法人会員

「近郊ターミナルの景観づくり」についての「二子玉川ライズ」でのシンポジウムは、その風景の実体験をもって当地で聞くことができるもので、参加者の理解と共感がより深いものになったに違いありません。駅から「リボンストリート」と名付けられた外部空間を歩いて会場へと向かいます。この空間は、二子玉川駅から二子玉川公園までの約1kmを繋ぐ、多様な景観を楽しく散策できる「ウォーカブル」な遊歩道です。ここには今のところ野外彫刻や珍しい異国のシンボルツリーは見当たりません。いわばランドスケープアートであり、その風景を舞台にする人々が主役だそうです。歩きながら従来にない街であることが伝わってきます。鉄道会社が主体の開発だからこそ、自動車依存でないこのウォーカブルな好事例を図れたのではないかとも思いつつ「ここが如何に造られてきたか」について何が語られるのか、開演前の期待が膨らみます。

シンポジウムは、事業主、開発コンサルタント、設計者がそれぞれ語り、続くパネルディスカッションでファシリテータにより興味深い話が引き出されました。

開発の変遷について、土地利用企画と再開発事業組織の立ち上げから完成迄の35年間に亘り、再開発に携わられた宮原氏（(株)アールアイエー）が明快に紹介されましたが、長年のご苦労は発表時間では到底語りつくせぬものだったことでしょう。長期プロジェクトという、ダム等の大規模土木事業と対比されますが、事業の開始時に最終的な姿が描ける土木事業と異なり、再開発は完成型が見えぬまま進めなければならないことを宮原氏は指摘されていました。その間、都市計画制度や手法の変化やバブル景気と崩壊、リーマンショック等の経済状況の波もあり、決して楽な航海ではなかったはずですが。それにも関わらず「二子玉川ライズ」を魅力的な街区として生み出すことに成功したのには、佐藤氏（(株)日建設計）も話されたように、事業コンセプト、すなわち目指すべき価値観をぶれずに関係者が一貫して共有できたからだと思います。つまり多様な関係主体の長期プロジェクトを成功させるには、高い志と実効性のあるコンセプトの共有が鍵となるということなのでしょう。

しっかりしたコンセプトがあるからこそ、それと合致し更に推し進めるものであれば新しいことでも柔軟に取り入れていけるのだと思います。そのチャレンジの好例としてLEED-ND認証取得が注目されます。LEEDは、米国グリーンビルディング協会による、環境に配

慮したサステナブルな建築物や街づくりに対する認証システムで、世界150ヵ国以上に普及拡大し今や環境性能評価の世界的な基準です。LEEDはブランディングツールとしても受け入れられ環境不動産の市場を変容させていると聞きますが、単に格付けが目的ではなく、それを動機に結果として優れた環境が実現していくことに価値があると考えます。個別の建物やテナントインテリアでの認証からスタートし、日本でも約75以上のプロジェクトが既に認証されていますが、LEEDのうちエリア開発を評価するLEED-ND（近隣街区開発版）で認証を得たのはここが日本初です。エリア単位での省エネ、省資源や、生物多様性保全、歩行者中心のウォーカブルな街や複数用途や職住近接と様々な居住者の共存、災害適応力のあるレジリエンス性などを高く評価することにより、都市の抱える課題の解決を促し、より良い都市環境を実現し次世代に継承していくことを促すのがLEED-NDの理念といえます。一方「二子玉川ライズ」は、LEED-ND制度が始まる前から、その理念に合致するコンセプトと具体的な計画で開発が進められていたわけで、グローバルな課題認識と解決で先行していたということでしょう。周辺で見られる植物を採用し生物ネットワークを構築したこの地ならではのランドスケープにて、生物多様性で事業評価するハビタット評価認証制度「JHEP」の最高ランクAAAを取得したのもその一つです。つまりLEED-NDの高ランクでの認証取得は目的ではなく当然の結果と思われま

す。しかしプロジェクト統括を務めた渋谷氏（東京電鉄急行(株)）によると、LEED-ND認証取得にあたっては、区の二子玉川公園を認証範囲に含める等、自治体との連携の苦労等もあったそうですが、なかでも社内でLEED認証への理解を得ることが最も大変だったとのこと。認証の費用対効果への問いには「それは見込めません」と答えたそうですが、認証の結果は関係者が想定しなかったことも含め、これから様々に「プライスレス」な多大な効果をもたらしていくことでしょう。

結果的に本認証として世界初のLEED-NDゴールド認証取得というのは、国際的に極めて高い水準の環境価値を創出したことの証で、そのブランド価値は計り知れないものだと思います。ローカルにあってグローバルに発信し、世界で注目されているブランディングに成功したといえるでしょう。「二子玉川ライズ」は、国内外から益々注目されることになるに違いありません。

プロジェクト竣工後、開発コンセプトをいかに運営チームに引き継ぐかが重要で、コンセプト文書の継承やLEED-ND取得はそれに有効だと渋谷氏は語ります。運営担当者による恣意的な改変を防ぐことにもなりますが、これは開業後の変化を否定するのではなくコンセプトに沿った発展を助けることになります。そして事業主、コンサル、設計者に共通していた射程は、自分たちがいなくなった後のこの地の幸福な発展でした。

第2回街に飛び出す作品展 「芸術性豊かな環境と景観の創造」

一般社団法人日本建築美術工芸協会は、建築家、美術家、工芸家、これらに関わるその他多くの人たちが互いに連携協力し、芸術性豊かな環境と景観の創造を目的として、わが国の文化向上に寄与することを願い設立した団体です。

「街なかミュゼ活動」は建築・都市空間に美術・工芸などの造形作品を取り入れ、人間性豊かな環境づくりを推し進める試みで、日本建築美術工芸協会が取り組む活動として、ますます広がりを見せて展開しています。

平成27年10月24日（土）～11月1日（日）建築会館ギャラリー・イベント広場において「第2回街に飛び出す作品展」を会員及び一般から募り開催致しました。10月26日にはスターツCAM株式会社とオーナー様のご協力により「街なかミュゼ活動」出展作品選考会を実施しました。

応募申し込み者22名作品28点をaaca推薦者選考委員会：帛屋 正選考委員長（鹿島彫刻コンクール幹事長・アートプロデューサー）、米林雄一選考委員（東京藝術大学名誉教授・彫刻家）、山極裕史選考委員（三菱地所設計株式会社・建築家）、平山健雄展覧会部会長により物件ごとに推薦作品を複数推薦しました。最終選考はスターツCAM株式会社とオーナー様で行いました。各作品の前には作者が立ってオーナー様に作品を見ながら作品コンセプトをはじめ素材の特徴や作意などの説明を行いました。そこでは作品の持つ力と共に、作者のプレゼンテーション力が発揮される場となっています。その中からスターツCAM株式会社とオーナー様がaaca推薦者選考委員会のアドバイスを受けながら11作品を選定しました。

オープニングパーティでは、aaca岡房信副会長の挨拶、オーナー様、スターツCAM株式会社、aaca選考委員の紹介があり、選出された作品の作者には、推薦状とスターツCAM株式会社からの副賞が手渡されました。

選定された作品は、aaca推薦者選考委員会の立会いのもと、設置位置や設置方法の検討をしながら建物竣工に合わせて設置していきます。

「第2回街に飛び出す作品展」
展覧会実行委員長 安河内敦子

「街中ミュゼ活動」設置案件

課題A：東京都文京区本郷2丁目計画

- *井上勝江（春を待つ） *山崎輝子（兆）
- *小泉伸子（絆） *横山徹（環）
- *安河内敦子（シェル No.5）



山崎輝子（兆）



井上勝江（春を待つ）



横山徹（環）



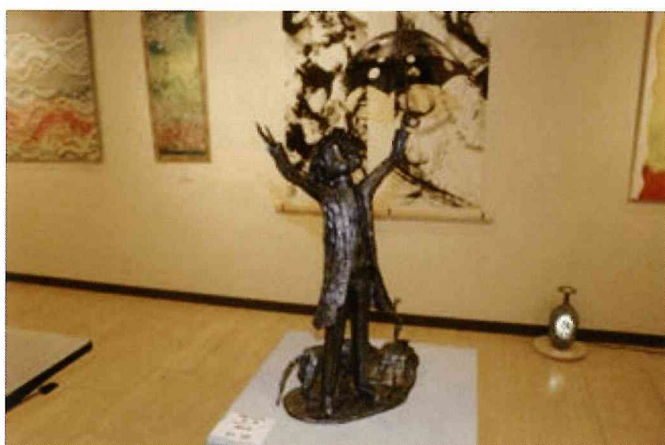
小泉伸子（絆）



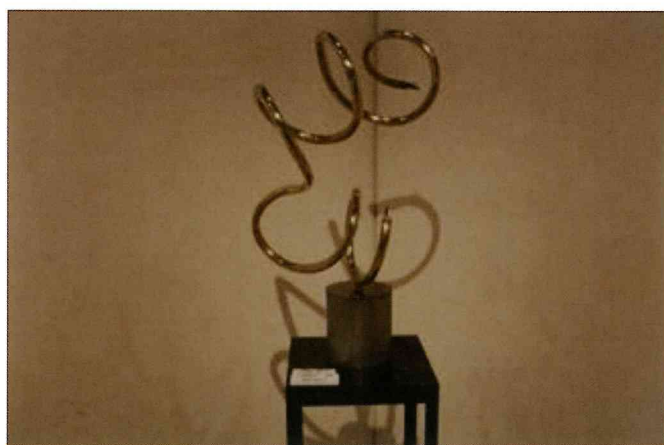
安河内敦子（シェル No. 5）

課題 B：東京都世田谷区太子堂 2 丁目計画

- * 鈴木法明（雨あがる・マケット希望） * 小野寺恵美（CLAY SPIRAL）
 * 重田恵美子（TOMORROW-希望）



鈴木法明（雨あがる・マケット希望）



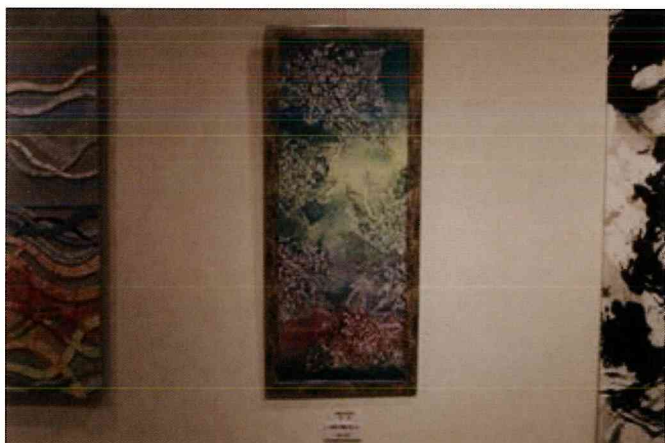
重田恵美子（TOMORROW-希望）



小野寺恵美 (CLAY SPIRAL)

課題 C : 埼玉県和光市丸山台 2 丁目計画

* 井上勝江 (イヴの涙) * 白野順子 (九寒溝・黄龍の思い出) * 吉野ヨシ子 (想いの詩)



白野順子 (九寒溝・黄龍の思い出)



井上勝江 (イヴの涙)

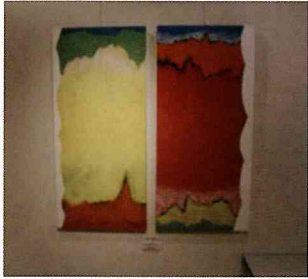


吉野ヨシ子 (想いの詩)

「街に飛び出す作品展」 出品作品



無題・・・あなたがみたままに・・・
松田 静心



賛歌
吉田 佑子



内生
中村 昌子



花のあかり
中村 昌子



「Terre」～土に寄り添う
三上 紀子



再成へのπ-0.03 I. II.
平山 健雄



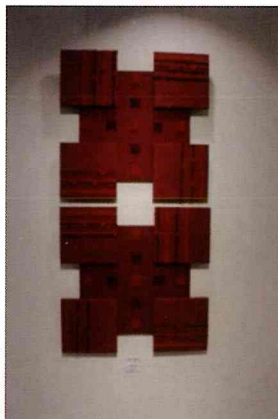
カーザ・ド・オーロ (金色の館)
山崎 輝子



記憶のゆきさき
川口 満



Time of Red
山崎 和子



はじまりのはじまり (天海地)
宮野 仁美



ハルの風
松本 治子



LOVEPOP-La
Premavera1501



LOVEPOP-The Birth of Venus1503
鍵井保秀



間
野口 真理





小泉 伸子

ファイバーアーティスト

株式会社アートセンター 講師
アトリエK 主宰
日本建築美術工芸協会会員

はじめまして、小泉伸子と申します。日ごろは、銀座や水戸、そして地元の我孫子にて染織講師をしつつ、創作活動を並行して行っております。この度、第2回「街へ飛び出す作品展」へ参加させていただいたことがきっかけで、僭越ながらこちらの会報へ寄稿することとなりました。

私の作品制作の原点となったのは、幼少期の頃、帰り道に薄暗くなった空をふと見上げると、そこには無数の星が輝いており、「あの星空の向こうはどうなっているのだろう」と興味を持ったことでした。その興味は成長するとともに大きくなり、高校生になる頃には、アルバイト代で天体望遠鏡を購入したほどでした。そして、この望遠鏡で惑星や星雲を観測し、その姿かたち、大きな衝撃を受けたものでした。

また、幼少期から絵画や造形に親しんでおり、未来のことを空想しながら制作することを楽しんでおりました。美術分野への進路を志し、高校卒業後に進学した専門学校で、染織の分野に足を踏み入れ、繊維素材の自由性に魅せられてゆきました。これらの体験から、私の創作活動は「宇宙」と「繊維」が、その源流となりました。

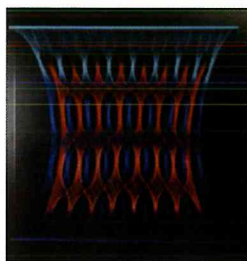
専門学校卒業後は、わたなべひろこ先生をはじめ染織作家の方々の助手をしつつ、染織の経験を積み重ねました。当初は、先生方が主に扱っていたスラングやタペストリーといった手法で創作をし、80年前後に神奈川県美術展等に出品しておりました。その後、結婚や出産で空白の期間がありましたが、上述の先生方からは創作から離れずムリのない程度に続けるよう指導され、これを受けて1993年に名古屋で開催された国際掌中新立体造形展で25cm立方の立体作品「ホール」を出品しました。これがタペストリー等の壁掛作品から、現在に至るような立体造形の転換点となり、1995年以降は大型(50cm×50cm×100cm程度)の自立式立体造形を制作し、新制作展へ出品をするようになりました。また、90年代末頃からは、繊維の光沢をより魅せるために、これまでのマクラメ(繊維を結び付ける手法)から、ラッピング(繊維を巻き付ける手法)へ変えるようになりました。

2000年代に入ると、表現方法にさらなる幅を広げるべく、一層の躍動性を求めるような実験的作品を制作するようになりました。たとえば、2003年に

制作した「ブロッサム」では、花束をもらった際に発生した廃材の包装紙を用い、草花から種子が飛び出してゆくような情景を表現し、作品を観る鑑賞者との対話ができるようなことも試みました。

2000年代も後半になると、作品の題材もこれまでの「宇宙」から離れてゆき、「人との心のつながり」へと変わってくるようになりました。この頃になると高齢となった両親の介護を経て、その最期を看取ったことから、親しい人との関係も有限であることを感じたためです。2009年に制作した「絆」では家族との絆を、また、同年制作の「レクイエム」では亡母への葬送の思いをこめました。また、作品も自立式の立体造形から、壁面上での立体造形へ変わっていったことも、その特徴です。2000年代以降の実験的手法のいくつかは評価をいただくことができ、イタリアやスロバキア、ウクライナ等の国々で展示されるに至りました。

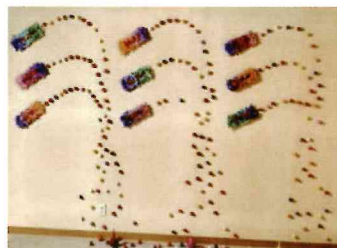
今後とも、スペースデザイン分野の発展を念頭に、さまざまなものへ題材を求めながら、繊維を用いた立体造形に取り組んでゆく所存です。最後になりますが、「街へ飛び出す作品展」への出品と、このような会報へ掲載いただける機会を下さった日本建築美術工芸協会の皆様へ、厚く御礼申し上げたいと思います。



パルサー(1978)



ホール(1993)



ブロッサム(2003)



レクイエム(2009)



絆(2009)



川原 昭

彫刻家

市川美術会会員

日本建築美術工芸協会会員

彫刻を始めて約半世紀になります。気長に無理の無い制作が幸いして長続きしました。創作は平面、立体を問わずに手がけていますが、立体は硬いイメージですが、メカニックなものから、ナイーブで心象的な表現まで幅が広ので、多くの作品を残しました。

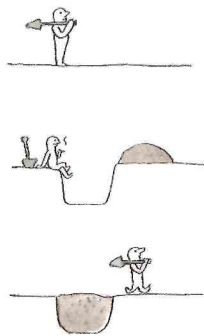
アルタミアの壁画、古代ギリシャ、エジプトの彫刻、名も知らぬ、アルチザンと呼ばれる人々の手の巧みから、アートは現代に引き継がれているのでしょうか、このような先人に感謝しながら拙い作品を制作しております。

平面作品は人間の心のひだに届くような、何気ない生活の一部をテーマにしています。表現技術はまだですが、気持ちを和ませる作品を多く制作しました。

造形作品は人間の不思議な行動を楽しく、面白く、表現できないかと思っています。特にふとした時の意外な驚きや感動、ユーモアに心を癒される、心情的な作品を多く手がけて来ました。

彫刻家の夢

眠っていて見る夢は眼が覚めた瞬間ほとんど忘れてしまいます。しかし心を穏やかにして一つ一つ思い出すよう心がけると、時としてはっきりと再現出来る事があります。これは遠い過去から遺伝子を通して、人間の根源に繋がっているような気がします。医学的になんの根拠も無いのが寂しいですね。



私は眼が覚めている時も長い夢を見ています。彫刻制作中はずっと夢の中にいます。子どもの頃の白昼夢と同じですが、無意識の深層心理の中で遊んでいます。そこには、いろんな神々が現れて、次から次へと話しかけてきます。

それによると、大昔の人々は生まれるとすぐ亡くなります。負けずに子を産む。どんどん亡くなる。どんどん産む。

自然界の中では他の動物、植物と競争して生き残るため、毎日が大変、重労働、干ばつ、大雨、地震、雷竜、巻伝染病、ちょっと年を取るとエビのように腰が曲がってすぐ病気になります。神々も決して手を差し伸べないし助けもしない。宇宙の摂理のまま、さっさと死んで、地球の肥やしになる。

今も同じ、死んだ人はすべからく神になる。死んで地球のエネルギーになります。私のところは好き勝手に宇宙を駆け巡る。人々がかつてに作り出すすごい有毒物など、気にとめずこちらは未来に向けて素晴らしい解毒剤のような作品を作っています。



仲間たち



アートパラダイス 12 回展



水の精



アートパラダイス 12 回展



優遊



今里 隆
建築家

元東京藝術大学客員教授
元日本建築美術工芸協会員

第54回aaca講演会「次世代に活かす日本建築」は建築家 今里 隆先生の60年に渉る建築家として今日まで数々の作品の設計に活かされた日本建築の伝統と未来への継承を語られました。

まず、建築家を志された経緯は、建築模型を作る彫刻家の家に生まれ、幼少のころそのアトリエに多くの建築家が訪れていたこと、そして京都市立美術館の設計者である前田健二郎先生に会い東京美術学校に進学を勧められたと話されました。入学後、吉田五十八主任教授の研究室に入られました。吉田教授はヨーロッパを視察した際、民族・歴史・伝統が基盤になり受け継がれていた建物をたくさん見たことから、帰国後、それまでの日本建築に近代性を与え新しい日本建築を生み出そうと決心されました。今里氏はその後の吉田教授の設計手法を手本として腕を磨かれました。

吉田教授の戦後の作品は、日本美術院会館・大和文華館・そして四代目の歌舞伎座で三代目は空襲で焼失した為、四代目を吉田研究室が設計する事になり所員の今里氏も係り、昭和25年研究室の持てる力の全てを注いで完成させ、戦後の日本に希望をもたらした意義ある建物となり、今里氏は五代目歌舞伎座の建設に伴い、劇場の設計監修を任せ吉田デザインを忠実に再現する為、最先端の建築技術を駆使し復原されました。

今里氏は京都南座、大阪松竹座、そして四・五代目歌舞伎座に係り、特に新しい歌舞伎座は吉田氏の足跡をたどる仕事となり、感慨深かったと語られました。



(四代目 歌舞伎座)

次に「次世代に活かす日本建築」について話されました。

現代の統一性のない都会の街並み、郊外の規格化された住宅街など、似たような光景が広がっています。建築はその地の歴史・風土に根差し、周囲の環境に溶け込むものであるべきと今里氏は数々の建物を設計されました。その基盤は学生時代奈良法隆寺の五重塔の

解体修理を見学した際、浅野 清先生から塔は左右対象でなく隣接する金堂や周りの植栽・遠景の山々をも含めた比例により、周囲との調和を図るという当時の棟梁の感覚が素晴らしいとの事でした。その時から建物そのものだけでなく遠景をも含めて比例を大切にしてい、周囲との調和を図ることが今里氏の建築の設計における基礎となったそうです。

その比例の感覚を学ぶためには、形の美しい古建築を数多く見ることに、さらに何度も見ることによって目を養い自分の感覚として取り込む事と言われました。

材料の吟味について話されました。

私は納得のゆく木材を見つけるために吉野や木曾、台湾まで出かけよく吟味し材料を決めます。

ようやく見つけた木材が思った通りの仕上げになった時の満足感は何にも代えがたいものです。様々な建築用材がある今、それぞれの材料の性質・耐久性を熟知してこの環境にはこの材料でこの工法が最も合い相応しいとの的確な判断を下せる力が建築家としては大変重要ではないでしょうか。

また人間力の重要性も建築家を目指す次世代の方々伝えていきたい一つと言われました。

建築家のしごとは、建物を建てたい施主の希望を現実のものにすることです。敷地に会い相応し形を造り最近では建築面積や高さ等の法的な制約が多くなり、以前にもまして難しさがありますが、造った形に施主の好みや希望を入れ間取りや詳細を決めて図面にする、工事が始まると施工をする建設会社や工務店と打ち合わせをし、現場へ出かけて工事の監理をする、それが建築家の仕事です。お施主との関係をより良く保つことは勿論ですが、頻りに現場へ出かけ棟梁をはじめ、左官・建具などの職人さんと仲良くなることも大切です。多くの人々が力を出し合って造り上げてゆきます。皆の力が結集してこそ初めて良い作品が生まれます。

建築に関する知識だけでなく美術・歴史など広い分野に亘る勉強が必要であるし、お施主さんに信頼され、係わる会社の方々や職人さん達が『この仕事は面白い・やりがいがある』と思ってもらえる様な人間力も要求されます。これから建築家を目指す方々は机の上の勉強に限らず、何にでも好奇心を持って挑戦し様々な事を補給してゆくことが大切だと思います。人間力は建築家として大変重要な要素と言われました。

今日まで関わられた主な作品を紹介されました。

最も規模の大きい作品は「国技館」です。鹿島建設との共同設計でしたが、鹿島建設には技術面、私は主にデザインを担当し、お互いの長所を出し合って完成させた作品です。国技である相撲の殿堂に会い相応しく、防災機能を備えた多目的にも利用できる建物をコンセプトに設計を進めてまいりました。外観は角を面取りにした約90メートル×90メートルの四角形の大地にどっしりとした、おおらかさを感じさせる外観となりました。大きな建物は背を高くするとバランスが悪

いので低く抑えることによって日本建築らしい落ち着きと、大相撲の力強さを表したのです。また大屋根をいかして屋根のそそぐ雨水を集め、地下に貯め雑用水として使用する雨水利用システムを完備しました。



(国技館)

私は美術館の設計もいくつか手がけ一番印象に残っているのは、日本画家の平山郁夫先生の故郷に建てた美術館です。敷地の東北に門を置くことによって門から玄関まで長いアプローチを設けることができました。アプローチはこれから目の前に広がる絵画や彫刻が並ぶ非日常の世界への転換の場であり、これから展開する別の世界への期待感が高まる場所です。門を入り数メートル進むところで塀越しに建物の屋根が少し見えてまいります。正面には玄関が見え脇に咲く草花を楽しみながらさらに玄関に向かって進みます。縦長に敷地を活かした距離のアプローチによって雰囲気を出すことが出来ました。アプローチによる演出は古建築にもたくさん見られます。京都の銀閣寺・西芳寺などアプローチを進むにつれて期待感が増す魅力的な空間創りが生み出されています。玄関に入るとロビーがあり、その前に瀬戸内海の島々をモチーフとしてデザインした庭が広がります。縦長の庭をデザインするのは難しいのですが庭園デザイナーの中島 健氏が瀬戸内海に点在する島々を表す築山を上手に、雰囲気のあるスペースを配置しました。ロビーからは大・中・小の3つの展示室を順番に見ることが出来る簡潔なプランの美術館です。瓦葺きの上屋根と銅版葺きの下屋根がバランス良く収まり、道路から見ても落ち着いた姿になりました。平山先生の自然観・芸術感を育んだをふるさとの穏やかな青い海や緩やかな緑の山並み、やさしい日差しといった瀬戸内の自然に囲まれた良い作品になったと思います。



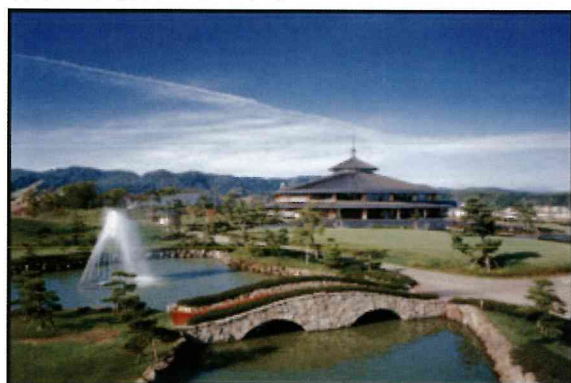
(平山郁夫美術館)

最も新しい美術館の作品は、今年4月に竣工しました私が基本デザインと監修を務めた、北野美術館戸隠館です。現地に赴いたところ戸隠山を囲む自然に恵まれた素晴らしい敷地でした。広い敷地の中から最も良い景色を望むことが出来る高台の土地に美術館の位置を決め、六角形の展示室と2辺の長さが異なる変形六角形の建物を渡り廊下でつなぐというデザインとしました。冬は2mを超す雪が積もる地域で規模が小さいながら大自然の景観の中で存在感のあるとても良い美術館になったと思います。



(北野美術館戸隠館)

ゴルフ場クラブハウスの一つ、ビンセントゴルフクラブ仙台で仙台に隣接する名取市の郊外に緩やかな丘陵地帯に設計しました。松の樹木を切ることによって眼前に景色が広がり、その景色を四角い建物一点より見るよりも円形のほうが、よりワイドな景色を楽しむことが出来るので円形を基本としてアプローチ・広場・母屋・浴室等、大きさも異なる3つの円形の施設を重なり合うよう設計しました。



(現・仙台ゴルフクラブ空港コース)

社寺の設計もいたしました。社寺の設計において最初に大切なことは、その神社・寺の歴史を勉強し理解する事です。歴史を紐解く事によりおのずと設計にあたり大事にすべき物が見えてきます。敷地が広くいくつかの建物が点在する神社・寺においては各建物の建設された年代が異なり建築様式がばらばらな物があるので設計依頼を受けた建物の根本的に用途・周囲との調和を考え合わせながら進めていかなければなりません。社寺設計は後世に残るといふ建物を創るといふ光栄な仕事であるとともに、建築家として重い責任のある仕事です。



(醍醐寺霊宝館・外観)

京都・真言宗醍醐寺派総本山であり名刹の醍醐寺霊宝館増築と伝法学院新築の仕事も手掛けました。

次に私が数多く手がけた住宅設計についてお話しします。住宅は人の生活に密着している点に難しさがあり、またそこが建築家としての面白みでもあると思います。都内の屋敷町の中にある位置する現地には森のごとく木が茂っている都心とは思えない良好な環境に建てた住宅です。施主は伝統的日本文化の衰退を危惧しておられ手作りの様式が現代の日本建築を完成させたことを海外から訪れたお客様に見て頂き、日本文化の素晴らしさを世界に発信したいという希望を持っている人でした。そこでこの本格的木造建築の家が実現致しました。



(某 住宅)

もう一つご紹介いたします。

鎌倉の古刹の境内に女性ひとりの余生を楽しむために建てた小さな住宅です。

庭の一部が崖になっていてそこに石仏が安置された祠がある風情ある敷地なので自然との一体感を図った平面といたしました。廊下で繋がれた建物によって玄

関・洗面所・応接間・客室8帖を含めて、ひとつの接客空間と仏間などのプライベートの空間が分離されています。応接間・客室8帖の開口部の建具はすべて戸袋に収納することができます。建具が収納されることによって広い視野のなかで四季おりおりの景色を室内から楽しめます。生活をゆっくり楽しむ場として、飽きのこない住宅という点では非常に満足した住宅でした。

次に谷中にある日本美術院は1898年に岡倉天心が創立した美術研究団体で院展の開催をはじめ、活動は日本美術界において大変意義深いものであります。30年前にも設計を依頼され平屋建ての建物を設計しましたが、狭くなり建て直しが計画され引き続き私が設計を担当することになりました。設計に当たり第一に考えたのは関東大震災や戦争の被害を免れ、木造の寺院や住まいが数多く残っている風情ある周辺・街並みとの調和でした。周辺の住民の景観・環境に対する関心も高く以前からそこに存在していたかのような景観に溶け込ませ、さらに以前よりもっと広い面積をどのように確保するか が課せられた課題でした。

最後に 先生の夢を語られました。

今、日本建築が殆ど作られなくなり、古来より脈々として受けつがれた技術が残ってゆくのは社寺建築だけという可能性の多い現状です。

技術を継承してゆくことは大切な事と思えますし、日本建築の技術・知恵・美意識、そして建物を造る棟梁や職人たちが大切にしてきた探究心や辛抱強さといった精神性を含め、次世代を担う方々に伝えていけるような環境づくりができれば、と思っていますが日本建築を建てるという需要がないという事ではなかなか難しい事だと思えます。便利さだけが主にされる現代にあって、工程を積み重ね丹念に造ってゆく事の重要性を認識する、その意味でも日本建築を後世に伝えてゆくことは大変意義のあることだと考えています。

洋風建築では味わえない日本建築の奥ゆかしさと魅力を一人でも多くの方々にわかって頂き、日本建築を後世に残してゆく、それと同時に新しい本格的な日本建築様式、これを確立するまでが私の夢であります。

60名を超える参加者の前で、次世代の日本建築を志す若き建築家や、建築を取り巻く美術・工芸にたずさわる人々、そして材料メーカーの人々への、今里先生の熱いメッセージをお聞きしました。(終わり)

今里 隆氏 略歴

1928年 東京に生まれる

1949年 東京美術学校(現東京藝術大学)
建築科卒業

1949~64年 吉田五十八(日本芸術院会員、
東京藝術大学名誉教授)研究室勤務

1964年 杉山隆建築設計事務所創設

1988年~91年 東京藝術大学客員教授



井上一三

株式会社三菱地所設計

技術業務部

日本建築美術工芸協会 法人会員

北陸新幹線開通で話題の金沢から富山、黒部まで11月13日より2日間、バス移動で恒例の建物視察会に初参加させて頂きました。見学先の企画選定、充実した視察会に準備頂きました皆様へ改めて感謝の気持ちで一杯です。僭越ですが見学感想文を寄稿します。

・金沢海みらい図書館/シーラカンスK&H/2011竣工
純白な箱型に六千に及ぶ丸窓、外観は単純なつくりであるが、内部はとてもダイナミックな空間。丸窓から射し込む柔らかな光、細部に用いられる曲面デザイン、多種の書籍と僅かなタスク照明が見事に調和し和ませている。またデザインを生かす構造・設備の高い技術集積も見事である。外周部の窓に影響せずブレースを巧みに配置し、内部は300φの繊細な柱で屋根を支える構造形式、書棚からの床下吹出し空調など空間を生かす工夫が各所になされ技ありである。



・金沢市立安江金箔工芸館

箔打ちは打ち紙の粘弾性的性質により金も面内に延び拡がり、衝撃圧縮が納まると紙は復元収縮しその繰り返により極限まで薄い金箔となる。500年前から経験的な物理学に基づき、日本の美と技が完成されているのに驚くばかりである。

・金沢21世紀美術館/妹島和世・西澤立衛/2004竣工
今や金沢を代表する名勝、年間約150万人が訪れる。立地のみならず、特徴的な円形と大きなガラス面が従来の美術館と異なり来る人拒まず迎え成功している。また、内部は広さ高さの異なる矩形の展示室で構成され、外部と中庭から日差しを感じ美術館特有の閉鎖的な印象がなく、金沢散策に気持ちよい空間である。

・鈴木大拙館/谷口吉生/2011竣工

延床200坪足らずの小さな展示館であるが、3つの小空間を外部と内部の回廊で結ぶ。水景、壁、緑、光のシーケンスは、静謐で極めて気持ち良い。少ない要素と端正なデザインは、押付けがなく極めて控え目である。これぞモダニズム、日本美の象徴と思う。凡人の設計者は、なぜこのような緊張感ある空間を設計できないのか改めて悟る次第である。

・瑞龍寺

江戸時代建造の禅寺であるが、当初は周囲に濠を巡らし城郭であった。総門、山門から法堂まで一直線に配列し、左右に禅堂他をほぼ対称形に整え四周を回廊で結ぶ整然とした構成は、気持ちを落ち着かせる。

・TOYAMAキラリ/RIA・隈研吾・三四五設計JV/2015竣工
ガラス美術館、図書館等で構成される市街地再開発ビル。1階エントランスから6層の吹抜けはフロア毎の平面形状が異なり、壁と天井の木板ルーバーには傾きやリズムの装いがあり非常に複雑、視線も引付けられ新たな空間のイメージである。建築に目移りするのは施設が閑散としている為か今後の発展が楽しみである。

・発電所美術館/三四五建築研究所/1926竣工

旧水力発電所はその使命を終え美術館として再生され、敷地内にアトリエ、宿泊棟を整備し、創造と展示活動の理想的な施設である。高さ10mの大空間の展示スペースは圧巻であり、電力から芸術を造る機能に転換されても、上手に継続利用される魅力を感じた。

・前沢ガーデンハウス/榎文彦/1982竣工

広大な敷地にマナーハウスを彷彿させる佇まいに改めて感銘を受けた。ラウンジ空間は日本民家を暗示した柱と梁で構成され、上層の部屋と一体感を持たせている。開口部、階段、照明など細部にわたり極めて完成度の高い統一あるデザインが施されている。設計当時はポストモダンの全盛期であったが嫌みのない装飾、日本的な繊細なデザインでまとめられ30年の年月が経ても品位を感じられるのは流石である。

東京に戻りGoogleMapsで空から2日間を振り返り探訪。何れも建物配置の美しさに改めて感銘を受けました。





中野 恵美子

織造形作家

元東京造形大学教授

日本建築美術工芸協会会員

ファイバーアート、テキスタイルデザインと呼ばれている染織技法及び繊維素材を用いた造形作品や染織デザインの活動がある。それらの元となった背景についてアメリカのヴァージニア・ガードナー・トロイ氏が広い文脈のもとで研究し記した『アンニ・アルバースとアンデスの染織-バウハウスからブラックマウンテンへ』を2016年12月に翻訳出版した。

現代美術に大きな影響を与えたバウハウス(1919~1933)に関して建築とデザインについてはよく知られているが、織工房のことは日本ではあまり紹介されていない。ましてや画家のクレーが織工房で教えていたことや、南米ペルーのプレインカ時代のアンデスの織物がバウハウスで手本として研究されていたことはほとんど知られていない。19世紀後半から20世紀初頭にかけて、ヨーロッパでは従来の装飾美術に対し手工芸による改革が唱えられていた。そのような時代にヨーロッパ以外の地からもたらされるプリミティブ・アートに対する関心は強く、その内容は純粋で真正、技術的にはシンプルであるが本質的に抽象であると考えられ、ピカソのアフリカのマスクを応用した作品に見られるように他の文明からもたらされたものが積極的に作品に取り入れられていた。染織品もまた理論上、芸術上の探求において重要な役割を果たし、ベルリン民族学博物館は、当時ペルーで発掘されたアンデスの染織品を熱心に収集し展覧会を度々開催した。そのシンボリックな図柄のもつ抽象絵画的なイメージは画家達を魅了し、美術関係者に大きな影響を与えた。



アンデスの織物

バウハウスで指導にあたっていたクレーもまた、織物の模様と構造を高く評価し理解した。彼のバウハウス時代の構成への取組みは、織布の構築のように一段ずつ、一項目ずつ、一層ずつイメージを築き上げる事に熱中していた。「プリミティブ・アートは手作りの工程からできたものであり、常套的なヨーロッパの芸術より、より本能的に創造され、根源的な表現である。」とクレーはそれに魅かれ、賞讃し、研究した。一方、織工房では伝統的なタペストリーからの離脱を求め、アンデスの染織品を手本に経糸と緯糸が同等に見える

織物に向かった。そしてクレーから造形理論を学んだ学生は、簡単な織機ではあるが、複雑な技法で織られたアンデスの織物をさらに研究しその構造、工程、主題、実用性からさらなる可能性を展開させたのである。

その織工房の学生であり後に指導者となったアンニ・アルバース(1899~1994)は、それらの資料からモチーフを取るのではなく、織構造から直接に発生する非具象的なユニバーサルな言語を発展させることに関心を寄せた。バウハウスのワイマール時代は表現主義的であったが、デッサウに移ってからは複雑な色彩と形体のパターン化と共に、多層織物のような複雑な織の構造について研究した。彼女が貢献した重要なことは、幾何学的な抽象的視覚言語を構造的な工程と結合して工業に応用したことにある。建築の中で役割を果たす機能的な布についても考案した。

バウハウスの閉鎖の伴い、アンニ・アルバースは夫の色彩学者のヨゼフ・アルバースと共にアメリカに渡り、ノースカロライナ州のブラック・マウンテン・カレッジで教えることとなった。そこではバウハウスとクレーの教えを授業で実践しさらに研究することで、バウハウス時代と異なる壁掛けを創りバウハウスからの離脱を見せた。つまり糸で「描く」技法は、以前は彼女が避けていた絵画的な表現への挑戦となり、「絵画的織物」ということばに行き着いた。文字のない地域の人々が意志を伝達するのに染織品が十分な役を果たしていたことから、糸を「意味を伝達するもの」ととらえ、それを通して単に実用的な製品としてだけでなく、アートとして創造した。



アンニ・アルバース 「TWO」

クレーとアンデスの織物を師と仰いだ織作家でありテキスタイルデザイナー、教師、著述家、そして収集家であるアルバースは、20世紀以降の織物の教育、実践及び理解につながる革新的な取組みを行い発展させた。そして繊維を用いた表現がアートに仲間入りする道を開き、その後のアメリカ及び世界のファイバーアートに多大な影響を与えた文字通りの先駆者である。そのアンニ・アルバースについて論じられている。



角一 吉昭

大和リース株式会社
東京本店規格建築事業部
事業部長

日本建築美術工芸協会 法人会員

大和リースは、昭和34年6月に、大和ハウスグループの一員として創業しました。当初は、大和ハウス工業へ部品を供給するメーカーでしたが、工場では部材を製作し、現場で建築物を組み立てるといった創業者・石橋信夫の発想により、部品供給メーカーから、プレハブ建築メーカーとなり、さらにリース事業を行う企業となりました。

現在では、大和ハウスグループの中核企業として、4つの事業部門による企業活動を展開しています。その事業内容は、主に自社工場生産によるスピーディーな体制で建築物を供給する「規格建築事業」、地域に密着したディベロッパーとして土地活用を追求する「流通建築リース事業」、カーリースを主体に、介護福祉ロボットのリースや自走式駐車場建設も行う「リーシングソリューション事業」、人と自然が共生できる社会の実現を目指す「環境緑化事業」となっています。お客様の課題を解決するために、それぞれの事業部門が必要に応じて有機的に複合化して、ワンストップで対処する企業です。

規格建築事業において、建築リースを始めた当初は高度経済成長期にあたり、建設現場事務所や、ベビーブームによる学校校舎不足に仮設でレンタルするという形で、プレハブ建築の供給を他企業に先んじて行い、官公庁とのつながりが大きくなりました。地震や台風などの大規模災害時の復興支援のための仮設住宅の供給もこの事業の大きな役割の一つです。

1999年にPFI法が成立すると、当社は専門部署である「民間活力研究所」を立ち上げました。その役割は、官公庁へ対して、PFIやPPP手法による公共施設整備手法の提案や、プライベートセミナーを開催し、啓蒙活動を行うこと等でした。今では当たり前のように言われている公民連携などの手法は、当時はなじみが薄く官公庁の方々にも周知できていなかったのです。

PFI手法において、当社が代表企業となり取り組んだ事例としては、現在15件あります。当社の取り組む案件は次世代を見据えた事業を行うという方針から、学校が多いことが特徴としてあげられます。最近では、石川県野々市市立野々市小学校、埼玉県滑川町立月の輪小学校、富山県富山市立中央小学校などがあり、維持管理も順調に推移しています。また、PPP手法での取り組みも数多くありますが、その中で、外国

人留学生の増加に対応する学生寄宿舎の整備事業への取り組みを得意としています。当社での取り組み事例としては、金沢大学学生留学生宿舎「先魁（さきがけ）」、東京外国語大学国際交流会館3号館、大阪府立大学国際交流会館などがあります。

当社はリース事業を行ってきた関係で、リサイクルや環境に関する意識が高く、大和ハウスグループにおいて、全社でISO14001の認証を取得した最初の企業となりました。環境と密接に連動している環境緑化事業においては、当社は、ヒートアイランド現象を緩和する屋上緑化システム「エコヤネ」から事業を開始し、フランスの企業から特許取得した壁面緑化、室内緑化とアイテムを増やしてきました。室内緑化については、昨年より、ユニットを組み合わせることで空間を演出できる「i.G」という商品を開発して販売を開始しました。これには、若い研究者やデザイナーが集まる機関とコラボして開発にあたりました。室内にあるパーテーションなどのような家具として機能して、植物に対する灌水なども自動的にできるうえ、癒し効果なども考慮した商品となっています。

当社は、地域社会における課題に対して、公共・民間を問わず、様々なノウハウを持った4つの事業を複合化し、お客様のニーズを吸い上げ、課題解決を行っていきたくと考えています。



富山市立中央小学校 PFI



東京外国語大学国際交流会館3号館



左：壁面緑化

下：室内緑化 i.G





小野寺 優元

彫刻家（石彫）

日本建築美術工芸協会会員
調査研究部会 副部会長

中之条ビエンナーレ総合ディレクター山重徹夫氏は、私たち aaca 一行を旧廣盛酒造で出迎えてくれました。ここでは近年まで「廣盛」「不動の霊水」という銘柄の酒が造られていましたが、酒造所としての役割を終えたあと、建築家福島慶介＋松葉邦彦両氏により酒蔵はリノベーションされました。aaca は地域の伝統的建築がアートの拠点として再生された好例としてこの旧廣盛酒造を表彰しています。山重氏はこの敷地内に新設されている大太鼓の収納庫が、建築作品であるにもかかわらず、直に看板が取り付けられていることを指摘し、行政の無神経さを嘆いていましたが、リノベーションされた麹蔵は、アートの展示空間として見事に存在感を放ち、それに触発されたアーティスト藤原京子が質の高いインスタレーションを制作しており、aaca の卓見のあらわれのひとつといえます。

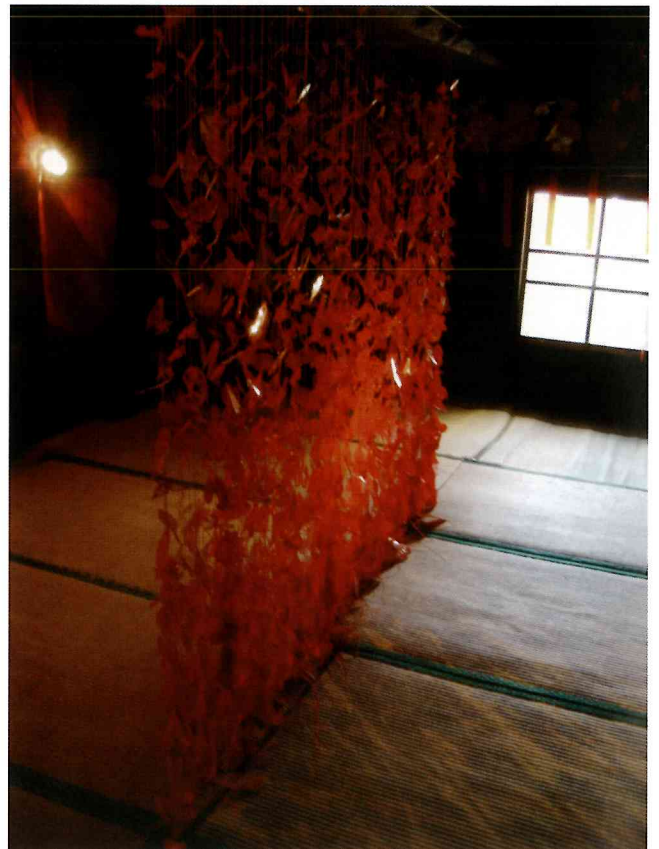
10年目で第5回の開催となる中之条ビエンナーレは、目に見える多くの成果を挙げていますが、いくつかの課題も明らかになり転機を迎えているようです。ふだんほとんど人通りが無く、歩行者を見かけても高齢者ばかりで若者の姿が見られない中之条のメインストリートが、ビエンナーレ開催期間中のシルバーウィークにその風景が一変したそうです。1日数千人がビエンナーレを訪れ、展示会場のなかにはその鑑賞に支障をきたすほど来場者でごったがえすところもあったと、管理者としての山重氏は複雑な表情で話してくれました。参加アーティストは163組。展示会場は中之条町全域に散在しており、全作品を観るにはどうい1日



旧廣盛酒造にて 右 山重総合ディレクター

では不可能なところを、今回私たち調査研究部会の一は朝から夕刻まで過密スケジュールを強行し、やっと半数の作品に出会うことができました。全体としてアートの質は高まっている印象を受けましたが、アートイベントには作品のレベルが上がると地域の期待から乖離してしまい、作品のレベルの底辺を広げると外への発信力が弱まるというジレンマがあり、今このアートイベントの方向性が問われています。

中之条ビエンナーレは廃校を会場として活用しています。現在中之条には7校の廃校がありますが、それらはボロボロの校舎ではなく建造物として何の問題もありません。これは少子化が急激に進んだことと、子





供の教育に対する地域や親の期待がいかに大きかったかを物語っており、同様の現象が全国各地で起こっていることが推察でき、廃校の活用方法のひとつとしてアートイベントの開催が検討されることが予想されます。しかし、これには行政側、アート側双方に解決しなければならない課題があるように思われます。もともと地域の過疎対策として始まった中之条ビエンナーレ。多くの観客を集めていることは評価されますが、あくまで一過性の賑わいであり、このアートイベントを契機に行政はこの地域の少子高齢化、過疎対策に歯止めをかける具体的な政策を打ち出してもらいたいものです。

アーティストの中には長期の滞在制作のため、地元の方の家に泊まり込んで制作したり、この地域の自然と人の魅力にふれ、古民家に移住したりアトリエを開設したりする作家もわずかではありませが見られるようになりました。このような動きを促進させるべく行政は、かつてゴルフ場を誘致したようにアトリエ村の誘致、狭いアトリエで困っている都会在住作家のための作品収蔵施設の運営、世界各地からアーティストを招聘するアーティスト・イン・レジデンス事業、都会の小学校と連携したワークショップ村、等の事業を検討するなど国内外から若い世代のアーティストがやって来て、地域の文化とアートを融合させた新しい文化が創造されるような具体的な政策を積極的に展開すべきです。

一方、廃校の教室空間に展示した作品に見られる傾向として、これは全国どこの学校でも同様だと思いま

すが、教室空間には子供達の歓声や教育への期待といったものが、閉校後何年経っても亡霊のように校舎に染み付き、アーティストも観者も一様な感慨が強く心に去来します。アーティストはサイトスペシフィックアートとしてこれらの場の記憶を読み解き作品を制作しますが、教室に展示されている作品の多くが、自己と場のやりとりが同様な概念に縛られているように観え、作品としての迫力が伝わって来ない感を得ました。アーティストはこのような場の放つ磁力線ともいえるものと自己のオブセッションなものとを対峙あるいは調和させて緊張感みなぎる空間を実現させてはじめて自己の制作コンセプトの領域を拡張できるのです。今後増加が予想される廃校を会場としたアートは、サイトスペシフィックという意識がより強く求められます。ホワイトボックスでの展示はアーティストのコンセプトを深化させますが、サイトスペシフィックアートはコンセプトを拡張強化するといえます。

aacaは、各地域の伝統文化が衰退するなか、地域の過疎対策として開催されるアートイベントに対しても地域再生の観点から積極的に向き合っていくべきです。とりわけ廃校活用のアートイベントに対しては、喫緊の課題として調査研究を急ぎ提言としてまとめるべきでしょう。

中之条ワンデーツアーの最後は六合エリアへ向かいました。論語の記述にあやかり「六合」と書いて「くに」と読むこの地区は、重要伝統的建造物群に指定され、独特な雰囲気に包まれていました。中でも1806年築造の「湯本家」の展示は、時間軸が三階建の各部屋に深く刻まれ、この家の記憶が音をなして迫ってくるような感慨にとらわれました。酸化鉄ベンガラが塗り込められた蔵、地元の石で積んだ石垣、石仏、さらに湧水、野草、木々……。お蚕さんの里として真綿のような歴史物語を語りかけてくれる中之条六合地区へ出かけてみてはいかがでしょうか。

(おのぞら ゆうげん)



AXS 株式会社
佐藤総合計画

代表取締役社長 **細田雅春**

本社 130-0015 東京都墨田区横網2-10-12 AXSビル
Tel. 03-5611-7200 Fax. 03-5611-7226

地域事務所 横浜・東北・中部・関西・九州・沖縄・北京

<http://www.axscom.co.jp>

Life with Green Technology
三協アルミ

iS
アイ・エス100

片引き窓の進化系

三協立山株式会社 三協アルミ社
営業開発部 / 〒164-8503 東京都中野区中央1-38-1
住友中野坂上ビル18F TEL (03) 5348-0360 <http://buildingsash.net/>

機能性液晶フィルム **TANYO**

「TANYO タンヨー」

GOOD DESIGN AWARD
2015年度受賞

Cloudpoint 株式会社クラウドポイント
www.cloudpoint.co.jp

本社 〒150-0002 東京都渋谷区渋谷2-16-1 TEL 03-5468-0700
大阪支店 〒542-0081 大阪府大阪市中央区南船場4-12-12 TEL 06-7711-3588
福岡営業所 〒812-0011 福岡県福岡市博多区博多駅前4-4-23 TEL 092-292-0407

空間を自由に演出できる液晶フィルム
電源のON/OFFで透明と乳白を切り替えます。



株式会社エスエス
03-3719-1140

www.ss-multi.co.jp



株式会社 梓設計
AZUSA SEKKEI 代表取締役社長 杉谷文彦

本社 〒140-0002 東京都品川区東品川2-1-11 TEL.03(6710)0800
東北・羽田・横浜・静岡・名古屋・大阪・中国・九州・沖縄・北京・瀋陽・ハノイ
<http://www.azusasekkei.co.jp>



織部製陶株式会社

東京支店
〒160-0008 東京都新宿区三栄町8
Eフラットビル 1F
TEL 03-3359-9461 FAX 03-3359-9450
E-mail k.taka.3359@olivebricks.co.jp
URL <http://www.olivebricks.co.jp>

磁器質、せっ器質を問わずタイル、レンガ、テラコッタなど焼き物全般に
わたり、受注生産、オーダーメイドにて製造、販売いたしております。
ハンドメイドのテクスチャーや・釉薬の妙・と云った 焼き物本来の
味わいを外壁タイルや床素材として活かす、モノ創りを行っています。

こんなダウンライトをまっていた
よくばりダウン
3つの色温度を簡単切替。



高気密SBダウンライト
φ100 / 白熱150Wタイプ / Ra83 **¥8,800** (税別)

大光電機株式会社
商環境営業統括部 / Tel.(03)5600-7796 Fax.(03)5600-7797
〒130-0026 東京都墨田区両国4-31-17 [DAIKO](http://www.lighting-daiko.co.jp)

「防水」を通して社会と環境に貢献する

総合防水材料メーカー
日新工業株式会社

アスファルト熱工法
改質アスファルト工法
シート防水
塗膜防水

東京都足立区千住2丁目23番4号
TEL 03-3882-2424 (代表)

WALLCOVERINGS FABRICS FURNITURE
PHOTO: JARIE CHURCHILL



株式会社トミタ www.tominet.co.jp
東京都品川区東五反田5-25-19 東京デザインセンター 6F A・B TEL.03-5798-0081

未来に誇る社会環境を、強く、美しく、
確実にサポートしていく。

株式会社豊田商店
<http://www.toyodashoten.co.jp>

〒147-0067 東京都大田区雪谷大塚 9-13
TEL 03-5754-2901 FAX 03-5754-2902

砂利・砂・碎石の生産並びに販売
セメント・生コンクリート・コンクリート二次製品の販売
産業廃棄物の処理に関する業務

訃報 心からお悔やみ申し上げます。

宮本忠長会員 2月25日逝去



宮本忠長建築設計事務所会長 元日本建築士会連合会会長
日本建築美術工芸協会会員(1989・11～2016・2)、理事(1991～1993)
AACA賞選考委員(第一回・第二回)
協会会報 No.3 寄稿

町づくりにおける芸術環境 小布施街並修景デザインを通じて
1951年 早稲田大学理工学部卒業 佐藤武夫設計事務所勤務
1964年 宮本忠長建築設計事務所開設所長就任
作品 長野市立博物館、森鷗外記念館、松本市立美術館、他多数
受賞 吉田五十八賞、日本建築学会作品賞、BCS賞 他多数

新入会員

個人会員

三浦文典 〒152-0004	目黒区鷹番1-14-6	TEL 03-6452-2845	一級建築士(事)スターパイロツツ
原田真宏 〒135-8548	江東区豊洲3-7-5 研究棟 08D25	TEL 03-5859-8407	芝浦工業大学 原田研究室
山本想太郎 〒185-0022	国分寺市東元町2-13-13	TEL 042-325-4721	山本想太郎設計アトリエ
河原伸自 〒195-0072	町田市金井3-29-13	TEL 042-736-2236	コセンティエーノ・ジャパン(株)
池田嘉文 〒167-0043	杉並区上荻2-40-15	TEL 03-3390-0062	彫刻家
高久 茂 〒320-0856	宇都宮市砥上町350-28	TEL 028-648-1602	室内装飾 鷹匠
犬飼三千子 〒215-0002	川崎市麻生区多摩美1-6-2	TEL 044-954-9646	造形作家
山崎賢治 〒278-0033	野田市上花輪1064-7	TEL 04-7124-3315	(株)システムガラス工事
伊勢信子 〒603-8024	京都市北区上賀茂中ノ坂町23	TEL 075-701-3833	ステンレス造形
山崎香文字 〒277-0885	柏市西原1-30-4	TEL 04-7152-5626	造形作家
安田幸一 〒112-0002	文京区小石川2-9-8	TEL 03-3812-8945	小泉アトリエ
横山 徹 〒259-1322	秦野市渋沢2962	TEL 0463-72-8002	彫刻家
小泉伸子 〒270-1146	我孫子市高野山新田15-3	TEL 04-7182-1866	ファイバーアーティスト

法人会員

(株)小堀哲夫建築設計事務所 〒113-0001	代表取締役 小堀哲夫 文京区白山1-5-4 HAKUTSUBOビル3F	担当 小堀圭子 TEL 03-6801-8321
大和リース(株) 東京本店 〒102-0072	本店長 森川年人 千代田区飯田橋2-18-2	担当 規格建築事業部 角一吉昭 TEL 03-5214-2300
(株)野口硝子 〒252-0823	取締役社長 野口美枝子 藤沢市菖蒲沢710	担当 プランニング ディレクター 入澤郷子 TEL 0466-47-1144
(株)乃村工藝社 〒135-8622	代表取締役社長 榎本修次 港区台場2-3-4	担当 営業開発本部 兼平 慎 TEL 03-5962-1171
(株)フィールトフォーデザインオフィス 〒100-0011	代表取締役 志村美治 千代田区内幸町2-2-2 富国生命ビル27F	担当 経営企画 富田政子 TEL 03-3539-2881
(株)大建設計 〒141-0022	代表取締役社長 平岡省吉 品川区東五反田5-10-8	担当 本社 技術部門 デザインセンター 井上久誉 TEL 03-5424-8600
(株)日比谷アメニス 〒108-0073	取締役 鈴木誠司 港区三田4-7-27	担当 景観環境部 鈴木誠司 TEL 03-3453-2402
(株)岡村製作所 〒102-0094	市場開発部 部長 横田一広 千代田区紀尾井4-1 ニューオータニカーテンコート10F	担当 代表者と同じ TEL 03-5295-9640
郡リース(株) 〒106-0032	取締役社長 郡 正直 港区六本木6-11-17	担当 東京事業本部 取締役本部長 潮田伊佐夫 TEL 03-3470-0291

会員の異動

個人会員

渡辺 仁	住所変更	目黒区碑文谷4-7-13	会社名 (株)渡辺 仁設計事務所
------	------	--------------	------------------

東日本大震災「芸術文化復興預金」 積立額 2016年2月末現在 117,705円

編集後記

25周年を期して会報の構成を刷新し、表紙には会員の作品、内容も会員の皆様の活動や、一般の方々からの寄稿文等を中心に編集を致しました。

会報編集部会は、会員の有志の皆さんで編成され、記事の収集から編集・発送まで協力して運営されています。

会員の皆様の作品紹介、活動報告、展覧会、個展・出品展等のご案内、企業の広告等を会報に掲載いたします。

詳しくは会報編集部会にご相談ください。

発行 一般社団法人 日本建築美術工芸協会
発行人 会長 岡本 賢
〒108-0014
東京都港区芝5-26-20 建築会館6階
Tel 03-3457-7998
Fax 03-3457-1598
Url http://www.aacajp.com
E-mail info@aacajp.com

編集 総務委員会 会報編集部会
部会長 野口 真理
部員 飯田 郷介 石田 真人 竹生田 正
中村 弘子 山崎 和子 山崎 輝子

事務局



印刷協力 美和野印刷株式会社